

小学校社会科地理的分野における 地域学習の意義

— 栃木市立栃木第四小学校の校外学習を事例として —

奥澤 信行¹・柏木 美紀²

I はじめに

2020年度は新型コロナウイルス問題への対応で、異常な状況下での新学年スタートとなった。さらに小学校においては、こうした混乱に加えて、新学習指導要領の完全実施という課題への対応も迫られることになり、現場での負担は非常に大きくなっている。ところで今回の学習指導要領の改訂にあたって、学習内容に関して小学校では「外国語教育」「プログラミング教育」「道徳教育」などに重点が置かれており、今後の激変が予想される社会に対応できる人材の育成を主眼としていることが分かる。従来の学習指導要領の改訂にあたっては、こうした学習内容に関する変更点を強調することで世間の耳目を集めていた。しかし今回の改訂では「どのように学ぶか」という学び方に力点が置かれていることに注目しなければならない。そしてこの学び方に関する小中高を通じてのキーワードが「主体的・対話的で深い学び」であり、「何を学ぶか」よりも「どのように学ぶか」を重視して、子供たちがより能動的に学ぶ姿勢、すなわち「アクティブ・ラーニング」の重要性が強調されるに至ったのである。

¹白鷗大学教育学部

²栃木市立栃木第四小学校

責任著者e-mail: okuzawa@fc.hakuoh.ac.jp

アクティブ・ラーニングの姿勢は、全教科で求められているが、社会科においては地理・歴史・公民の3分野それぞれで、パソコンを駆使した地域の過去・現在・未来に関する情報収集が、具体的な活動の1つとして提示されている。ただしこうしたパソコンを利用しての調べ学習は他の教科でも行われることであり、社会科に特化した学習活動ではない。そして新学習指導要領を読み進めると、アクティブ・ラーニングの1つとして「フィールドワーク（実地調査）」が挙げられており、これを社会科や総合的な学習の時間で扱うことが望ましいと記されている。このフィールドワーク自体は、新学習指導要領にアクティブ・ラーニングとの関係においてその重要性が明記される以前から、社会科学学習の特に地理的分野において重視されてきた¹。ただしその実践事例に関する報告の多くは中学校を対象にしており、小学校でのフィールドワークの実態はあまり知られていない。これは中学生であれば地理的分野の履修は1・2年生であるため、年齢的に校外学習での安全確保については、ある程度生徒自身に任せられることが一因となっている。しかし小学校での地域学習は、2年生の生活科での「町探検」から始まるため、交通事故や不審者から児童を守る手立てを講じる必要があり、フィールドワークの重要性は認識しつつも、その実施に踏み切れない実態もみられる。また実施した場合でも校内での報告に留まっていることが多い。そこで本稿では小学校でのフィールドワークの実施に関して、2018年度に実施された栃木市立栃木第四小学校での事例を参考にして、その教育的効果と指導上の留意点について論じる。ここでは社会科だけでなく、「総合的な学習の時間」とも関連して、3年生の身近な地域の学習における通学範囲内の徒歩による巡検や、バスを利用した市内での校外学習の実践が記されている。実際に児童たちが自分の目で自然環境や人文環境を確認することで、地域をより詳細に知ることになり、その将来像を考える端緒となるのである。

Ⅱ 小学校でのフィールドワークの実践例

1. 栃木市立栃木第四小学校と周辺環境の概要

(1) 本校の沿革

栃木第四小学校は栃木市城内町にある公立小学校で、児童数221名が在籍している。(令和2年4月現在) 1936(昭和11)年4月1日に栃木第四尋常小学校として開校し、1951(昭和26)年4月1日に、校名が栃木市立栃木第四小学校に変更された。1977(昭和52)年4月1日には、学区の一部を栃木南小学校へ分離しており、本校と栃木南小学校の卒業生は、栃木南中学校へ進学している。

創立50周年記念にあたって、当時の海部俊樹文部大臣から頂戴した「向上無限」という言葉を校訓としており、学校で作製するポロシャツやTシャツのバックプリントには必ず施されている。(写真1)



写真1 当時の海部俊樹文部大臣による揮毫

(2) 本校の周辺環境

平成の大合併により、現在の栃木市は2010年(平成22)年3月29日に、旧栃木市²・大平町・藤岡町・都賀町の1市3町が合併して誕生した。その後2011(平成23)年10月1日に西方町、2014(平成26)年4月5日に岩舟町を合併して現在の市域となり、人口も県内第3位の159,056人(2020年7月31日現在)に達している。本校の所在地は、いわゆる「旧栃木市」と呼ばれるところであり、「蔵の町とちぎ」というキャッチコピーでまちづくりを推進している。合併により、大変広い自治体となったが、旧栃木市・大平町・藤岡町・都賀町・西方町・岩舟町、それぞれが地域のよさを生かしたまちづくりに取り組んでいるため、「栃木市」を学習する上でも個々の特色があり大変興味深い地域である。なお久石譲の作曲による市歌

「栃木市民の歌～明日（あす）への希望～」は、合併を記念して2015（平成27）年11月13日に制定されたが、夕方の5時に夕刻を知らせてくれる。

また全国各地で町おこしの一環としてイメージキャラクターの制定が盛んであるが、栃木市のキャラクターである「とち介」は、蔵の街の屋根を模している。2014（平成26）年の「ゆるキャラグランプリ」では、初登場にして全国8位に輝いた³。市内の小学生の間では、ノートや教科書を開いて頭上に置いて、「とち介～」という一発芸が定着しており、しっかりと地域に根差したキャラクターとなっている。（図1）



図1 栃木市の「とち介」

学区域内には栃木文化会館や栃木図書館などの文化施設や、宇都宮地方裁判所栃木支部、栃木区検察庁などの司法機関が集中する。また、栃木税務署や栃木県庁下都賀庁舎、栃木社会保険事務所、栃木公共職業安定所など行政施設の集



写真2 城址公園

積も見られる。また、本校のすぐ東側には城址公園がある。残念ながら遺構の多くは失われ、現在は東丸北西部の土塁の一部や堀跡と、堀ぎわには昔の名残を留める武家屋敷の白壁の塀が残っている。（写真2）

本校の西側には直線距離で300mほどのところに栃木文化会館がある。これは栃木刑務所の跡地に建てられたもので、刑務所は1979（昭和54）年、市内惣社町に女子受刑者収容施設として移設されている。また周辺には、神明宮や定願寺などの寺社仏閣が点在している。3年生の総合的な学習の時間で行う「町探検」では、この地域に住んでいる児童にとっては歩いて行けるところばかりで、非常に多くの見どころが近距離に点在している。

また学区内ではないが、栃木市役所は1994（平成26）年に旧福田屋百貨店の跡地に移転した。1階部分は東武宇都宮百貨店栃木市役所店、2～

5階は市役所というように全国でも珍しい店舗と融合した庁舎になっている。庁舎を一から新しく建てる場合と比べて費用が3分の1で済むことと、1日に約1,500人が市役所に訪れることから百貨店の集客につながるというよさを生かした。テレビ東京の「アド街ック天国」で栃木市が紹介された際にも、この市役所の立地とアイデアのよさがランクインされた。(写真3)



写真3 百貨店と融合した市庁舎

2. 本校における「総合的な学習の時間」のテーマ

本校の「総合的な学習の時間」(以下、「総合」と略す)では、「環境」をテーマに取り組んでいる。3年生では学区内や市内の商業や観光の環境について、4年生では「太平少年自然の家」での宿泊学習を生かした栃木県の地理的事象や福祉の視点での環境について、5年生では「とちぎ海浜自然の家」での宿泊学習の際の川や海などの自然の環境について、6年生では鎌倉の修学旅行を生かした国際理解や観光地での環境を学んだ上で、再び栃木市の環境や観光に戻るという流れで学習している。また社会科の学習内容をおおまかに説明すると、3年生では市内、4年生では県内、5年生では日本全国、6年生では世界を対象とした地理的分野、さらに6年生では我が国の政治の働きと歴史上の主な事象が加わる。社会科の教科書で学習した内容と総合の内容を合わせて校外学習を実施したり、パソコンでの調べ学習を行ったりしている。

3. 授業実践

(1) 町探検

3年生になり、初めて総合の学習をするにあたって、オリエンテーションを行った。前述のように大きな枠組みがあるが、基本的には自分の興味

関心があるものを探求していく学習を主としている。子供たちは調べ学習が大好きである。特にパソコンで調べる学習を得意とする児童が多い。このパソコンによる学習の際に、ネットリテラシーも指導する。インターネットはとても便利で、素早く情報を得ることができる。しかし、正しい情報とは限らないこと、またネット上に公開している文献や画像等には著作権があり、勝手に引用してはいけないことなどを伝えている。しかし、どうしても文章にまとめる作業になると、この「この文章を使いたいです。」と要望する子供が多数出てくる。その際には「参考文献をまとめて記録する」という方法を学級全体に指導した。

フィールドワークの手始めとして、5月上旬に2日間かけて、学区内の徒歩による巡検を行った。以下が見学地であるが、1日目と2日目は学校の東側と西側の方面別に分けてある。この巡検の目的は、普段見慣れた学区内の景観観察に加えて、主な施設の様子を調べることにある。そのため

(1日目)

学校>神明宮・第二公園>満福寺>裁判所>定願寺>図書館・文化会館・南中学校>学校

(2日目)

学校>シルバー大大学校>栃木城址公園>学校

子供たちには「たんけんバッグ⁴」とiPadを持参させている。iPadは20台ほど所有しているが、授業での使用頻度は高い。子供たちは操作に手慣れているが、班に1台の割り当てであるので、グループでの共有を上手に行えるための指導が課題となっている。

学校を出発して最初の見学地である神明宮へと向かう。本校は単学級を基本としているが、平成30年度はこの学年のみ2クラスであった。したがって1クラスの児童数は少ないが、校外学習のように学年で行動する場合は、列が長くなるため、担当教員はより気を引き締めて引率しなければならない。(写真4)神明宮は栃木市の旭町にあり、天照皇大神をお祀りする神社で「栃木のお伊勢さま」の愛称で親しまれている。市内の中心部に神明造りの社殿を構えており、1403(応永10)年に栃木城内神明宿に創建された後、1589(天正17)年に皆川広照によって現在の地に移され、

栃木の総鎮守となった。なお「栃木」の地名の由来は、神明宮の屋根ぐし⁵の2組の千木⁶と8本の鯉木⁷から10本の木に見えたことから、この近辺を「十千木（とおちぎ）」と呼ぶようになったとする説がある。



写真4 整列して神明宮へ向かう児童

神明宮に隣接しているのが第二公園である。この公園は学区外であるため、本校の児童は子供たちだけで遊びに行くことはあまりない。これは本校と隣接校とのテリトリーを子供なりに感じているためではないかと考える。しかし隣接する神明宮には参拝に行った経験があることから、親しみを感じている公園ではある。園内ではくじゃくやオウムが飼われており、池や遊具も整備されており憩いの場となっている。「町探検」ということで、説明をしながら歩いたが、この公園に関しては子供たちの方が詳しいようであった。

次に真言宗の満福寺へ向かう。大師堂内に祀られている「三鬼尊」は、日本で唯一の三尊一体の鬼神で守護神となっている。(写真5) 以下はこ

【酒屋荒らしの鬼】

昔々ある冬の晩、お寺の近くの酒屋に大男が来て「酒をくれ」と大きな徳利を出しました。びっくりした酒屋の主人が、大徳利にあふれかえるほど酒を注いで渡すと、大男は小銭をおいて暗い夜道に消えていきました。

あくる朝、主人がその小銭を確かめると土間に木の葉が数枚落ちているだけでした。次の晩もその次の晩も同じことが起きたので、奇妙に思った主人はこっそり大男の後をつけていったのですが、お寺の境内で見失ってしまいました。

このことをお寺の住職におそろおそろ相談したところ、三鬼堂の赤鬼・青鬼・黒鬼のうち真ん中の青鬼が酒の臭いのすることがわかりました。そこで酒屋の主人はある日近所の男たちの力を借り、お寺の三鬼堂に上がり込み、青鬼を鉄の鎖で縛ってしまいました。それからというもの、その酒屋に大男があらわれなくなりました。

(当山に伝わる「下野の民話」)(満福寺のHPより)

の鬼についての伝説である。この伝説を子供たちに話すと、誰もが興味深そうにメモを取り始めた。身近にある寺院であったが、鬼に関する伝説があるとは思わなかったようである。こうした日頃は意識することなく見過ごしてしまいそうな諸施設から、新たな情報を得ることに興味を持つ児童も多い。そうした児童の好奇心をより高めるためにも、巡検にあたっては事前に見学地の情報をより多く収集する必要性を感じたのである。大師堂の中にはおみくじがあったので、子供たちはもっとゆっくり見たそうであったが、時間の都合もあったので、三鬼尊を拝観したら入れ替わりで退室しなければならなかった。(写真6) 見学地での時間配分が課題となったのである。



写真5 満福寺の「三鬼尊」

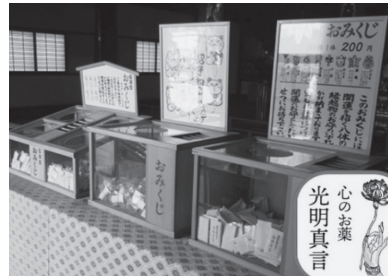


写真6 満福寺のおみくじ売り場

なお当日はとても暑く、熱中症対策として水分補給を促し、常に児童の体調に気を配りながらの巡検であった。(写真7) また児童の様子に気を遣いすぎる余り、引率教員自身が熱中症予防への対応が疎かにならないように留意する必要性を強く感じた。野外学習の実施時期については、近年の高温傾向を鑑み、5月から9月は避けるなど、児童や教員の健康管理を最優先してより慎重な対応が求められることを痛感したのである。



写真7 満福寺にて小休止

満福寺から定願寺に向かったが、途中の裁判所は所在地の確認に留めた。天台宗の寺院である定願寺は、市内中心部のほど近くにあり、広い境内には本堂を中心にして鐘楼や山門、古めかしい不動堂、また弁天堂や安産地藏堂などが配されており、厳かな雰囲気

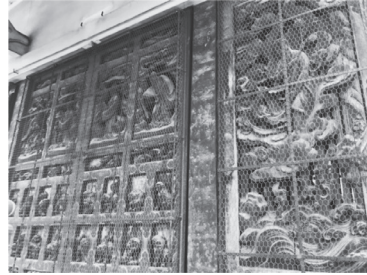


写真8 定願寺不動堂の彫刻

包まれている。不動堂の彫刻がこの寺院の見どころの一つで、かなり傷んではいるが、地元の名工である磯部儀兵衛の作といわれている。扉は透彫りで、北面武士の遠藤盛造が、僧文覚となって紀州熊野の那智の滝で修行する場面が彫られており、その精緻な作品に子供たちも驚嘆していた。(写真8)

定願寺を後にして、図書館や文化会館の立地を確認しつつ、栃木南中学校を經由して学校に到着した。以前も同じ栃木市に勤務していたが、実際に巡検することで、本校の立地している旧栃木市内の利便性を再確認できた。この点に関しては、都市の中心部に立地している小学校の児童はその利便性に気が付いていない場合があるので、郊外の小学校との比較においてしっかり指導すべきと考える。他の小学校よりも優位な条件の地域に立地していることが、子供たちのプライドを高めて地域に対する愛情の涵養に資するのである。

2日目は、県内に3校設置されている「栃木県シルバー大学校」の1つである南校に向かう⁸。このシルバー大学校もそうであるが、栃木市は景観を大切にするために、公的な建造物は蔵を模した建物が多くみられる。(写真9) この施設が立地している神田町には多くの子供たちの家があるため、シル



写真9 蔵を模したシルバー大学校南校

バー大学校自体を知っている児童は多かった。しかし、まだ小学3年生ということもあり、神田町に住んでいない児童にとっては初めて目にする施設であり、また実際に何を目的とした施設なのかまでは、大多数の児童ははっきりとは知らないようであった。今回、実際に徒歩による見学によって、その機能を知ることができたのは、子供たちにとってとても貴重な経験になったのである。栃木県シルバー大学校は、高齢者の健やかで生きがいのある人生を支援し、活力ある地域社会を築くため、積極的に地域活動を実践する高齢者の方を養成する目的で設立されている。2年間の学習年限で、定員は1学年120人である。授業料は年額19,000円、資料代年額2,100円と受講者が高齢であるための配慮がみられる。学習内容は座学による一般教養の他に、身体を動かすレクリエーションや調理実習、パソコン操作、救命救急など多岐に渡っており、毎週木曜日または金曜日に開講している。なお入学の応募資格は以下の3点であるが、この説明を聞いた子供たちは、高齢者になってからでも通える学校があることに関心を示していた。実際に施設を目の前にしていたためか、建物をiPadで写真を撮りながら、わずかではあっても生涯学習の意味を理解しようとする子供たちの姿が印象的であった。

- ▶60歳以上で県内在住のこと
- ▶地域活動を実践しているか、地域活動に意欲があること
- ▶25期生（平成17年度）以降のシルバー大学校を卒業していないこと（HPによる）

今回の2日間の町探検を実施するにあたって、下見をして子供たちに説明するための下調べも入念に行った。町探検や校外学習の実施に際しては、しおりやワークシートを持たせて、メモを取るようにしている。まとめる作業の時に使うことができ、また評価の一部としても利用することができる。メモを取らせると個人差が生じるが、大多数の児童は指導に従って、しっかりと記録に留めることができる。しかしクラスの中には、暑いとか疲れたと言って、メモを取らない児童も散見される。教室でできないことは、外へ出てできるはずがないので、日ごろの指導が生きてくると思

していただき、栃木市の観光や市役所として取り組んでいることを説明して下さった。この授業を元に、学習を進めることを子供たちに伝える。そして調べた内容をまとめて発表する学習活動には、外部講師としてお呼びした市役所の職員の方を再びお招きし、その成果を見ていただくことにした。「〇〇さんに見てもらうために頑張ろう。」という意識を持たせることで、モチベーションの維持につながると考えたのである。どんな授業でもそうであるが、最後に発表がある学習活動のときは、相手意識を持たせるように心がけている。今回の発表にあたっては、グループでまとめることにした。町探検で行けなかった場所でさらに調べたい場所がある児童には、見学に行かせることにした。学区内にある「岩下の新生姜ミュージアム」や「栃木市観光総合案内所」などである。T.Tの教員などに引率の協力依頼をして、多方面に分かれて見学に行った。見学に行かない児童はパソコン室での調べ学習や模造紙にまとめる作業を進めた。(写真11・12)



写真11 市役所職員による授業

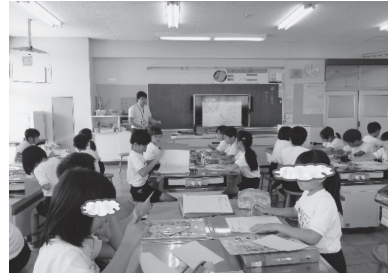


写真12 3年生45名が家庭科室で受講

出前授業と補足調査によってグループごとにまとめ上げた結果を発表し、市役所の方からコメントをいただく学習形態は、まさにアクティブ・ラーニングと呼ぶに相応しいものであった。その際にはiPadでプレゼンテーションをしたり、模造紙にまとめたものを発表したりと、グループごとの工夫が感じられた。なお発表の形式に関係なく、調査対象地選定の理由と質問項目を必ず説明するように指導した。どのグループも発表までの苦勞が偲ばれる内容と意欲的な姿勢が認められ、その成長した姿に教師と

しての喜びを感じたのである。最後に市役所の方から講評をいただき、子供たちはその頑張りを認められて満足した様子であった。(写真13・14)



写真13 児童によるプレゼンテーション



写真14 市役所の方による講評

さて栃木市の観光実態を調べるにあたって、外部講師による授業に加えて補足調査を実施するグループも現れた。その際の具体的な行動は、調査対象機関での聞き取り調査が中心となる。こうした調査に際しては当然のことではあるが、訪問先にアポなしで突然行くことはできない。まずは校内の体制を念頭に置いて、なるべく出張の少ない日をいくつか候補日として設定した上で、実施可能な日を教務主任と調整する。日程が決まったら先方に電話で依頼をするが、順調に調整が済むとは限らない。学校としては授業のやり繰りや児童の健康管理などを考慮すると、なるべく2～3時間目に実施したいが、訪問先の営業時間や混雑する時間帯を考えると必ずしも希望通りいかないこともある。そのため訪問時間の調整に手間取ることがあることを予め想定しておかなければならない。また何を見学したいかを伝え、説明や聞き取りから得られた情報に関して、帰校後の授業でどのように生かすのかを先方に話しておくことが大切である。「見学に行っているいろいろ教えてもらおう」という態度は訪問先に対して失礼にあたる。わざわざ仕事の時間を割いて対応してくださることを思うと、子供たちに対して事前準備をしっかりと行い、真摯な態度で調査に臨むことを指導しなければならないのである。そして訪問の日時が決まったら、管理職と連携して保護者用と職員用の実施要領に関する文書を作成しなければなら

ない。ワークシートやiPadなどを準備しておき、当日を迎えることになるが、天候によっては延期になる場合もある。そのときは再度先方との連絡調整が必要となる。以上の手順を踏んで校外での学習活動にたどり着くわけであるが、こうした段取りの中心となるのは学年主任である。今回の町探検や出前授業および補足調査、後述するバスでの市内巡りの実施に関わる準備は、学年主任として初めての校外の方が関わってくる仕事であった。学年主任としてのこうした仕事については、誰も教えてくれないし、また研修もあるわけではない。そのため以前に学年を組んだ際の主任の仕事の思い出しながら、手順を教務主任に確認しつつ、何とか実現させることができた。この校外学習の実施を通じて、今までお世話になった学年主任に対して感謝の気持ちを改めて感じるとともに、その責務の重さを痛感したのである。

(3) バス利用による市内巡り

栃木市には「市バス」と呼ばれるバスがあり、無料で利用することができる。学校ごとに割り当てが決められているが、少なくとも各学年で年1回は利用することができる。なおネットで予約をして申請すると、他の日でも利用が可能である。貸切バスであればゆったりと座れて、ガイドも乗車している。また車内での飲食もできるなど「お客さん」として乗れるが、1人2,000円ほどの費用がかかってしまう。しかし市バスであれば、飲食禁止などの制限はあるが、無料であるのでありがたい。市内の小学校ではいずれの学年でも校外学習で利用している。学校周辺の巡検と異なり、市内でも徒歩では見学できないポイントを回ることで、この市バスを利用することで実施できた。この巡検ではクラス担任2名と教務主任、T.T教員の4名が児童45名を引率して、以下の行程で見学や聞き取りを行なった。

学校>ひざつき製菓(工場見学)>星野遺跡>太平山公園(謙信平にて昼食)
>太平山神社>大中寺(七不思議の見学)>山車会館(山車を見学)>学校

最初の見学地は学区内に立地している米菓製造のひざつき製菓である。ここに勤務されている保護者もいるため、児童にとっては親しみのある工場といえる。また県内有数の米菓メーカーであるため、主力商品の煎餅を

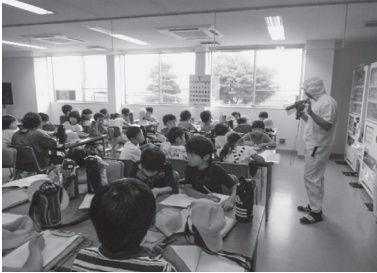


写真15 工場の概要説明



写真16 生産ラインでの説明

通じて子供たちの認識度も高い企業であり、工場見学の訪問先として適切であったと考えられる。会議室で会社の歴史や工場の概要、生産ライン見学にあたっての注意事項などの話があった。食品メーカーであるため、衛生管理には非常に神経質に



写真17 出来上がったばかりの煎餅

なっていることを強調されていたが、この点は児童にも伝わったようで、真剣にメモを取る姿が見られた。また見学にあたって髪の毛が混入しないように各自に帽子が配付されたが、これも品質管理の厳しさを認識させる上で効果があった。食品メーカーの工場見学では、出来立ての製品を試食できることがあると聞いていたが、出来立ての煎餅をいただいた時の子供たちの笑顔が印象的であった。以下は見学中のメモである。(写真15～17)

- 虫が入らないために、ドアがたくさんある。
- いろいろな機械がたくさんあって、おせんべいの生地がたくさん入っていた。
- おせんべいの生地があるところは、思ったより熱い所だった。
- 「うるちまい」というお米からせんべいを作っている。
- 1袋1,000kg入りの米袋を1日5袋使う。

食品工場の見学を終えて、北西へ18kmほど離れた星野遺跡へ向かう。市内星野山口付近に点在する縄文海進時代の遺跡である。縄文時代の遺物が、永野川に沿って田畑のそこかしこに分布している。旧石器時代の石器に似た遺物が、耕作地から発見されたのを契機に、1965（昭和40）年から1978（昭和53）年まで5次にわたって東北大学の芹沢長介教授らにより調査が行なわれた。発掘の結果、約8万年前に原人が活躍した前期旧石器時代の遺跡として発表されたが、多くの問題点が指摘されることとなった。そのため厳密には旧石器時代の遺跡が新発見された場所ではなく、その探索が初めて行なわれた記念の場所との位置付けが、現在ではなされている。その後、遺跡記念公園と遺跡記念館が整備され、来訪者も増加したことで、栃木市の観光スポットになっている。縄文時代の住居が復元されていて、誰でも自由に見学ができる。（写真18・19）周辺にはカタクリやセツブンソウなどの群生地もあり、歴史散策をはじめ、星野の四季折々の



写真18 復元された縄文時代の住居



写真19 星野遺跡での説明

自然も楽しめるので、小学生も気軽に歴史の学習と自然観察ができる見学地として最適である。ただし市の中心部から離れているため、バスでの移動時間が長くなってしまふ。そのためバスの中では、栃木県や市に関するクイズをいくつも用意しておき、バスレクを行うことを予め行程に組み込んでおく必要がある。これは児童の車酔いを防ぐための方策で、「落ち着いて隣の人と話しましょう。」と声掛けをして、全員で楽しく会話をしながらバスに乗っていることを忘れさせるのである。最近の子供たちはバスに乗り慣れていないために、わずかな乗車時間でも車酔いしてしまうケー

が多い。4・5年生の宿泊学習や6年生の修学旅行では長時間バスに乗りこたため、こうした機会に車に酔いやすい児童を把握しておくことは、今後の指導に際して有益なのである。

星野遺跡から移動して昼食場所の太平山へと向かう。すでにかんりの距離を歩いたので、子供たちも引率教員も疲れており、空腹の極に達している。栃木市内を一望できる謙信平で昼食となる。班ごとに座らせて、「いただきます」をさせる。子供たちが食べ始めたら記録のための写真を撮りつつ、食欲の状態を確認する。体調を崩している児童がいないか、声掛けをしてチェックするのである。(写真20) また同時に仲良く食べられるように指導する。今回はおやつを持たせたが、「おやつ交換はなし」とした。弁当やおやつには各家庭の事情が反映されるため、予期せぬトラブルを防ぐための対応である。すべての班での写真撮影と体調チェックが終わってから、教員は素早く昼食を済ませる。校外学習は時間との戦いであることを意識していないと、予



写真20 謙信平での昼食

定した見学地を回り切れないことがあるので、追い立てられるような状況となるのは、やむを得ないのである。1時間ほどの休憩の後、謙信平から太平山神社まで徒歩で向かう。随神門を通り抜けて太平山神社へ向かうが、途中のあじさい坂は急勾配で、小学生にとっては難所となっている。(写真21・22) 途中で落伍者もなく太平山神社に到着し、全員でお参りをする。(写真23) バスは大曲駐車場に移動しているので、太平山神社をから歩いて降りる。このコースは4年生の宿泊学習で「太平少年自然の家」の肝試しのルートになっている。先生方がお化け役となり、夜道を歩くのである。4年生の担任時に宿泊学習の経験をしたが、先生方が協力して子供たちに楽しんでもらおうと努力する姿に感銘を受けた。子供たちは非常に興奮していて、宿泊施設に連れて帰るのが大変だったのをよく覚えてい



写真21 随神門へ向かう子供たち

る。クラスメイトとの昼食や体力勝負の山歩き、豊かな動植物の観察、展望台から見下ろす関東平野など思い出に残る体験ができる太平山は、栃木市内の小学生にとっては格好の野外学習の場と言えるのである。

太平山からは比較的近距离の大中寺へ向かう。大中寺は「不断のかまど」「油坂」「根なしの藤」「馬首の井戸」「不開の雪隠」「東山一口拍子木」「枕返しの間」の七不思議の話が伝わる曹洞宗の名刹である。栃木市内の子供たちは、小さい頃から聞かされているためか、七不思議の話が大好きで、説明もしっかりと聞いてメモを取っていた。(写真24・25) 境内の七不思議全て回ると結構時間がかかってしまった。事前に下見をしたが、子供たちを連れてくると予想以上に時間がかかることが分かった。子供たちが興味や関心を示す見学地について



写真22 急勾配のあじさい坂



写真23 太平山神社での参拝



写真24 油坂



写真25 馬首の井戸

は、十分に時間を確保することで、ともすると暗記物と思われがちな社会科への学習意欲を高めることに繋がるのではないだろうか。

大中寺を辞して市内中心部に戻り、最後の見学地である山車会館を訪れた。2年ごとに開催される「とちぎ秋まつり」が、デジタル技術を駆使した演出と実物の山車3台で再現され、まつりの迫力と山車の素晴らしさを満喫することができる。1995（平成7年）年2月に開館した山車会館では、この県指定有形民俗文化財の山車の保存も兼ねて、祭りの興奮をいつでも楽しめるように3台の山車を常時展示している。（写真26）また定期的に他の3台と入れ替えをしながら、ハイテクを駆使して秋まつりを再現して見学できるようになっている。2階は、山車の資料に関する展示室になっている。（写真27）係員の方に説明していただき、山車について学ぶことができた。「とちぎ秋まつり」は本校の児童にとってはとても身近な祭りで、実際に山車を曳いたことがある児童も多い。また、3・4年生は、山車曳きに招待され、経験することができるので、地域を愛する心の育成には格好の行事となっているのである。



写真26 桃太郎山車



写真27 山車の資料に関する展示室

多くの場所を見学し、無事に学校へ戻ることができた。時間的に忙しくなってしまうなど、反省点はいくつもあったが、初めてのバスによる校外学習を計画し、怪我や体調不良の児童も出ることなく実施できたことに、安堵を覚えたのであった。

Ⅲ 栃木第四小学校での実践報告に関わる検証

1. 見学地の選定

小学校の社会科学習は、平成元年改訂の学習指導要領で3年次からの履修に変更となった。しかしそれ以前から、概ね地理的分野の学習に関しては、対象となる面的スケールが、身近な地域（通学区域）・市町村・都道府県・全国・世界へと拡大することで、視野を広げる内容となっている。その中でもフィールドワークを通じて身近な地域に関する知識と理解を深めることが、居住地に対する愛情の育成に資するとの意図がみられる。したがって栃木第四小学校の社会科に関する校外学習も、学習指導要領の指導内容に則って、巡検による学校周辺や市内の主要観察地、さらに宿泊学習による栃木県、修学旅行での関東地方へとその対象地を拡大することで、地理的空間認識の拡充を目指している。そしてこうした地域に対する見方を国にも当てはめて「国を愛する心⁹」の涵養に努める指導が求められているのである。なおこの方針は平成20年改訂の学習指導要領から特に強調されるようになり、今回の改訂でより明確になっている¹⁰。

さて学区内のフィールドワークは、2日間とも午前中の3時間程度で見学可能な徒歩による巡検で、寺社や公的機関が対象地となっている。この小学校は市内中心部に立地しており、裁判所や文化会館などの公的機関に加えて、「栃木」の由来となった市を代表する神社や名刹が集積している点において、町探検の実施にあたっては条件が整備された地域である。このように見学地が近距離で集中しているのは、市街地に立地している小学校にはフィールドワークを実施するにあたって、極めて有利な条件といえる。第1日目に時間をかけた見学先は神明宮・満福寺・定願寺の神社仏閣のみであった。それぞれの歴史的な背景を踏まえての見学に意味があるのは間違いない。しかし小学生にとっては、神社と寺院の相違を理解するのは難しく、どれだけの興味や関心を引き出せたのか、その評価は難しいであろう。そうした点を踏まえると、神社と寺院は1か所ずつにして、今回

は学区外であるために見学地から外れてしまったが、市役所や旧例幣使街道¹¹の栃木駅前から北に延びるメインストリートの商店街を対象にしてもよいのではないかと考える。これは総合の時間で年間テーマに「栃木市の観光」を設定しており、特に「蔵の街」によって誘客を図り、観光を地域活性化の柱と考えていることを踏まえると、蔵の並ぶ中心商店街を対象に加えるべきなのである。

第2日目の見学地は「栃木県シルバー大学校南校」のみであるが、この選定は少子高齢社会を考える際の話題の一つとして適切といえる。クラス内で高齢者と同居している児童が少数であることを鑑みたとき、向学心に燃える人生の先輩たちが学習する場であることを認識して、その学習成果を地域に還元している実態を理解させるのは、非常に有意義な指導である。そしてこれを契機に高齢者への関心が深まり、現在とは異なる家族像を考えさせることもできるようになる。これは新学習指導要領で「特別の教科」として新設された道徳との関わりにも活用できることに注目したい。また2日間の巡検では、歴史的な背景が説明の中心となる寺社や城址の見学が多く、現在から将来を見据えた課題と成果を提示できるのはこのシルバー大学校のみである。さらにこの大学校は県内3か所に開設されているが、県南では栃木に立地していることも、地元に対するプライドの育成に利用できる。都市の優劣を論じることに批判的な向きもあるが、地域学習を進めるにあたって、子供たちに居住地の優位点を認識させる指導は、「地域を愛する心」の涵養に繋がるため極めて効果的なのである。しかし実際のところは県内の都市力をみると、県南にあっては県下で人口第2位の小山が頭一つ抜き出ている。これは人口だけでなく、工業の生産高や商業の販売額などの都市力に関するデータによって、誰もが納得せざるを得ない。栃木県に限らず、東京と大阪以外の県内の都市序列を論じる際によく例に挙げられるのが、自動車のディーラーの店舗展開である。国産車のディーラーは、いずれも県内各市に販売店を設置しているが、高級車レクサスの販売店は、宇都宮に2店舗、小山に1店舗¹²のみで他市には

展開していない。また外国車の正規ディーラーについては、アウディとプジョーは宇都宮のみであるが、ベンツ・BMW・MINI・ボルボ・アルファロメオなどは宇都宮と小山に販売店を展開しており、県内他都市との格差は歴然としている¹³。こうした高級車を扱うディーラーが集積しているのは、その都市において一定数の富裕層が形成されており、営業成績の向上が期待できると判断したことによる。そして今後の成長が見込める都市との見方ができる。この視点から県内諸都市をみると、前述のように首位都市¹⁴宇都宮の都市力は別格であり、次いで小山が他都市に大きな差を付けており、第2位の座は揺るぎないといえる。ところが都市の評価に関わる諸要素を栃木と小山で比べると、市制施行の時期や主要公的機関の設置など、歴史的要件に関連した事項では、栃木の方が格上なのである。市制施行をみると栃木は、宇都宮・足利に次いで3番目であり、戦前の1937（昭和12）年4月1日である。これに対して小山は、佐野・鹿沼・日光に次ぐ7番目で、昭和の大合併による1954（昭和29）年3月31日と栃木より17年遅れての市制施行であった。そうした歴史的背景が影響したのか、宇都宮地方裁判所と宇都宮地方検察庁の支部は、栃木・足利・真岡・大田原の4市に設置されているが、小山で司法に関する機関は、簡易裁判所と区検察庁のみであり、それぞれ栃木支部の管轄下にある。また税務署に関しても同様¹⁵で、小山は栃木税務署管内となっている。そのため小山への税務署設置を要望しているが、国税庁の回答は厳しいようである。卑近な例として、本年6月22日に栃木税務署が移転に伴い新庁舎で業務を開始した際に、小山の関係者からの要望が当局によって一笑に付された件が挙げられる。これは税務署の設置は無理としても、せめて確定申告の時期だけでも小山市内で手続きできるよう要望したところ、取り付く島もない回答であった。このことは都市規模や事業者数などでは小山の方が優位であるにもかかわらず、商人の町として栄えた歴史のある栃木には早い時期に税務署が設置され、下都賀地区にあっては都市の格では不動の地位を占めていることの証左である。さらに税務署と似た事例として、メガバンクである

みずほ銀行の支店が挙げられる。みずほ銀行は前身の第一勧業銀行や合併相手の富士銀行の支店を統合整理して、店舗数日本一の支店網を形成しているが、特に第一勧業銀行の支店は各県の代表的な都市に限られていた。県内では宇都宮・足利・栃木の3店舗のみであったが、みずほ銀行になってからは、栃木支店小山出張所として小山駅前に店舗を構えるに至ったのである。その後、出張所から支店へと格上げになったが、昨今の店舗削減の対象となって、本年10月12日に栃木支店に移転することになった。店舗規模の違いはあるものの、栃木支店を小山に移転するのではない点に、栃木の持つ歴史的な背景に支えられた都市力を感じないわけにはいかないのである。都市力の判断基準は、現時点での人口や経済活動の実態が中心となるのが一般的であるが、歴史的経緯を踏まえると、県南地域における栃木の立ち位置は非常に重要といえる。こうした事実を教師が認識することによって、子供たちへの「地域を愛する心」の指導に自信を持って対処できるのである。

バス利用による市内の巡検では、食品工場や旧石器時代を想定した遺跡、寺社、観光施設などの見学と関東平野北端の太平山からの眺望と、1日での行程としては内容が多岐に渡っており、教員による下準備の苦労が偲ばれる。こうした行程が組めるのも、合併によって市域が拡大したことで、見学ポイントが増えたことも関係しているが、市区町村を対象とした学習活動においては、合併による地域の認識への配慮が必要となる。この行程では太平山南麓の旧大平町に位置する大中寺が、合併によって栃木の地域学習での対象に含まれるようになった。旧市内に立地している学校の場合、子供たちが合併によって栃木市となった旧大平町・藤岡町・都賀町・西方町・岩舟町に関して、どの程度同じ市域として認識しているのか、大中寺を栃木市の名刹として抵抗なく受け入れているのか、地域学習の上で非常に興味深い点なのである。それは現在の栃木市が、2010（平成22）年の1市3町による新設合併の後、2011（平成23）年に西方町、2014（平成26）年に岩舟町を編入にしたことで現在の市域が確定したが、

新設合併からわずか10年であるため、30代以上の教員にとっては合併前の市町の地域観が固定化¹⁶されているのではないだろうか。児童の両親や祖父母の世代では、旧市内と合併後に栃木市となった5町を区分していることは容易に想像できる。それだけに教員の側は年代を問わず、現在の栃木市の成立過程と旧1市5町が一体となった市勢の発展について指導できることが求められているのである。

最初の見学地を食品工場としたことは正解である。校外学習は児童にとって楽しみであると思いがちであるが、中にはこうした活動には関心がなく、仕方なく参加している児童もいることを考慮しなければならない。そのため子供たちが興味を示しそうな施設を最初に見学するのは、巡検の面白さを知らせる上で効果的である。特に食品工場は日々の生活に密着した商品を生産しており、また試食のできる点が子供たちには評判がよい。食品の生産では食の安全性に関して、厳密な品質管理が求められていることが、現場の方の話にあったようであるが、多くの関係者の努力があって1枚の煎餅を口にすることができる点をしっかりと指導しなければならないのである。

星野遺跡と太平山神社、大中寺はいずれも歴史学習と関連付けての見学地で、建築物および「大中寺の七不思議」のような故事来歴に関わる説明が中心となっている。こうした建築物や寺社の説明は、大半の児童にとっては興味関心が希薄で、その場ではしっかり聞いていても知識として定着しないことが多い。また複数の寺社の情報が混線してしまうこともある。京都や奈良への中学生の修学旅行で、事前学習を入念に行って見学しても、帰校してから時間を置かずにとどの寺社であったか覚えていないのと同じである。中学生ですらそのような状況に陥ってしまうのであるから、小学生ではなおのことその点が懸念される。そうした点を踏まえると、この巡検では歴史遺産や寺社だけでなく、現在に視点を置いて児童が身近な存在として認識できる食品工場の視察に加えて、関東平野を一望できる太平山の謙信平展望台からの景観観察、学校近くで1年おきに開催される「と

ちぎ秋まつり」での山車の見学が行程に組み込まれている点は評価できる。特に太平山は関東平野との明確な接点に位置しており、謙信平から好天であれば直線距離で約75kmの東京スカイツリーを目視できることは、児童にとって新たな発見となるであろう。そしてその際に教師が、首都東京が意外に近いことや、南西方向に秩父連山を望めることから、我が国最大の平野もそれほど広大ではない点に言及すれば、子供たちの面的スケールの認識はより深まるのである。

2. 実施に際しての留意点

徒歩による通学区域内とバス利用による市内全域のいずれも、2クラス45名の児童を引率しての巡検であるため、綿密な事前準備が求められる。こうした校外活動は年間行事の一つとして、前年度に日程を決めるのが一般的である。しかし運動会や学習発表会のように自校内で開催できる行事と異なり、聞き取り調査を伴う活動では訪問先の都合も考慮しなければならないので、日程に幅を持たせることが必要となる。また実施当日の天候によっては延期せざるを得ない事態も想定しなければならない。個人や少人数での聞き取り調査であれば、想定外の事態が発生しても対応が容易であるが、大人数のしかも小学生による巡検となると、関係する教員の負担の大きさは、経験者でなければ分からないであろう。学年主任としてこの指導の立案・実行の責任者を初めて務めたわけであるが、ベテラン教員や管理職の支援は必須であった。学年行事ではあっても学校全体がバックアップしなければ、安全かつ教育効果の認められる巡検の実施は難しいのである。

さて、訪問先への調査依頼に関して少々気になる点を指摘したい。寺社や遺跡については教員からの説明のみであるので、特に訪問の連絡は必要ないであろう。ただし大人数での訪問である点を考慮すれば、関係者が常駐している見学地には電話で一言連絡しておくことを勧めたい。これは先方に対する礼儀であると同時に、寺社であれば子供たちに故事来歴を話し

たいとの申し出が期待できるからである。もちろん見学時間や引率教員が直接説明したい場合など、諸条件を勘案してその申し出を受け入れるかどうかは、事前に決めておかなければならない。これに対して訪問先での説明や聞き取り調査を依頼する場合には、電話一本で用件を済ませるのはいささか問題がある。電話で概略を話した上で面会の約束を取り付け、訪問して実施に際しての詳細を詰めるのが、正規の手順といえる。ただし先方の都合もあるので、面会には及ばないと返事であれば、見学の詳細を記した学校としての依頼状を送付するのが筋である。こうした配慮はフィールドワークを必須とする地理学関係者の間では、調査を円滑に進める上での伝統的な手法とされてきた。しかし昨今のメール等によるやり取りに抵抗のない世代が多数を占めてきたことで、ケースバイケースの対応が求められることも事実である¹⁷。

計画が確定してから教職員と保護者への実施要領を作成しているが、教員にとっては面倒な作業ではあっても、保護者に対しては必ず配付しなければならない。保護者の中には校外学習ということで、子供が交通事故や不審者との遭遇などの危険な状況に巻き込まれるのではと危惧する向きもある。校内で学習していれば安心・安全は確保されていると考える保護者にしてみれば、フィールドワークによる教育的効果の重要性は理解しにくいのではないか。その点では校内での市役所職員による出前授業は、校外授業と同じような教育効果を期待できる。そもそもフィールドワークを実施する意義は、校外の自然・人文事象を自分の目で確認することと、その事象の成立要因を関係者との対話によって明らかにすることにある。今回の事例では、市役所職員による栃木の観光実態の説明を聞いてから、必要があれば景観観察を行っているので順序が逆になっているが、外部の方による説明と後日のプレゼンに対する講評によって一定の成果は得られたといえる。

次に2回の巡検での注目点を述べたい。町探検に際してのパソコンを使用した調べ学習で、情報の精査や著作権について指導しているが、小学生

の段階からこの点に言及するのは今後ますます盛んになるであろうICT教育の根幹に関わることであるので極めて有意義である。町探検は全行程を徒歩で実施しているが、45名の児童が一列で移動となると、50m近い長さとなるため、事前確認で危険個所を把握してあっても、実際の引率ではかなりの緊張を強いられるので、そのような状況に耐え得る精神力と責任感が教員には求められるのである。また見学先でのメモに関して個人差が生じた際に、意欲的な児童の指導に傾注したようであるが、これは教室での授業と異なり校外であるため、時間の制約で子供たち全員に同じ指導をするのは無理であるので致し方なかったといえる。普段と環境を変えた校外での学習が、積極的にメモを取る児童を生み出す契機となるのは決して珍しいことではない。主体的に取り組む児童に有益なアドバイスを与えることは、決して最良ではない。クラス全員に対する同じような指導を善しとするあまり、自ら学ぶ姿勢をみせた児童に十分な対応ができなかったとしたら、これは猛省すべきなのである。さてバスによる市内巡検では、交通事故の心配は軽減されたが、山道の歩行による水分補給や熱中症対策など健康管理での配慮が必要となってくる。また昼食時におやつ交換を禁止した処置は、各家庭の経済格差を子供たちが感じないためにも適切な判断であり、フィールドワーク実施前に講じることのできる対策である。これに対して引率中の突発的な事態には臨機応変な対応が求められる。いずれにしても校外学習にあっては、特に教員のきめ細かな指導が不可欠なのである。

IV まとめ

校外学習を滞りなく実施するためには、入念な事前準備はいうまでもなく、児童の安全確保や健康管理、教室から出た環境での学習意欲向上の支援など、教員が手を掛けるべきポイントは何か所にも及ぶ。今回の事例は巡検の立案から実施までを学年主任として初めて体験した報告であるが、

常に子供たちの行動を予測した対応により当たり前のことではあるが、安全に帰校できた点は高く評価できる。また校外学習が単なる遠足とならないように、学習効果を得られる事前指導に苦心がなされていた。こうして対象地の地理的情報を校内のインドアワークで得て、実際にフィールドワークに赴くのが校外学習の本来あるべき姿である。しかし昨今インドアワークで重視されているのがICT教育であり、パソコンの有効活用が時流に乗った最先端の指導と勘違いされている状況が散見される。

新学習指導要領では「どのように学ぶか」に力点が置かれ、パソコンによる調べ学習の重要性が校種を問わず強調されており、学校ではその利用に多くの時間が割かれている。また子供たちは幼少期からゲームに慣れ親しんでいるので、パソコンに対する抵抗感が少ないため、ネットで得られる情報の検索には意欲的である。したがってパソコンの操作や検索が上手であれば、「能動的に学ぶ姿勢」に関しては評価されるであろう。しかし調べ学習が及第点であっても、地理的事象を扱う学習においては、それだけでは不十分と言わざるを得ない。自分の目で確かめた上で、不明な点に関係者に聞いてその事象の成立要因を明らかにすることが最も重要だからである。つまり地域学習では、校外でのフィールドワークなしに教育効果を得ることはできないと断言できる。「百聞は一見に如かず」の姿勢が地域学習の根幹なのである。

注

- 1 拙著「地理学習におけるフィールドワークの重要性—アクティブ・ラーニングの視点を踏まえて—」白鷗大学教育学部論集11-2 pp.291-304 2017 で詳述している。
- 2 旧栃木市の市制施行は1937（昭和12）年4月1日で、県内では宇都宮・足利に次いで3番目であった。
- 3 同年の「ゆるキャラグランプリ」第1位は群馬県の「ぐんまちゃん」で、前年の第1位は佐野市の「さのまる」であった。
- 4 生活科・社会科・総合での野外学習に際して使用するクリップボードの背面に資料等の収納部分を設けた立ったままで使用できる教材である。
- 5 北関東や東北地方では家の棟を「ぐし」と呼ぶ。
- 6 社殿の屋上で交差した2本の木で「ちぎ」と読む。
- 7 棟木（ぐし）の上に並べた装飾の木で、鯉節に似た形からこのように呼ばれる。
- 8 他の2校は宇都宮（中央校）と矢板（北校）に設置されている。
- 9 回りくどい言い方であるが、「愛国心」とすることには反発の声が多い。
- 10 我が国固有の領土に関する近隣諸国との問題発生によって、小学校から国土認識に関する教育が必要との判断による。
- 11 江戸時代の脇街道の一つで、徳川家康の没後、幣帛を日光東照宮へ奉獻するために、毎年朝廷から派遣された勅使（例幣使）が通った。
- 12 「レクサス宇都宮北」は栃木トヨタ、「レクサス宇都宮南」は栃木トヨペット、「レクサス小山」はネットトヨタ栃木の経営である。
- 13 自動車のディーラーの立地に関しては、群馬県太田市で小山と同様の傾向がみられる。
- 14 英語表記ではPrimate Cityと呼ばれ、本来は国家単位の都市力において2位以下を圧倒的に引き離している都市のことで、一般的には発展途上国の首都が該当する。この概念を日本国内で考えた場合、県庁所在地がこれに当たる。ただし関東地方にあっては、県庁所在地と2位の都市との間に大きな差が確認できるのは栃木県のみである。
- 15 県内の税務署は宇都宮・足利・栃木・佐野・鹿沼・真岡・大田原・氏家の8か所で、小山には設置されていない。
- 16 平成の大合併はおろか、昭和30年前後の大合併時の地名をそのまま日常会話で使用する例はよくみられる。間々田は小山市でありながら、別の行政単位と認識している人が多いのは好例である。
- 17 公的機関の訪問に際しては、文書による依頼の方が好印象を持たれる。

